

(2) せい えん とん や 青蕨問屋の仕事

青蕨問屋は生産者から七島蕨の買い付けを行い、大阪や関東の取引先に卸すことが仕事でした。8月15日以降に作られた蕨は、「シンウチ」といい、これが出始めると各問屋の買い付けが始まりました。七島蕨の買い付けには、問屋が農家を回る方法、農家が直接問屋に持ち込む方法、期日を決め共販を行う方法などがありました。

買い付けた蕨は、品質によって分類され、畑作物には細い藁縄わらなわ、水田作物には太い藁縄で10枚一束にしました。束になった蕨には、それぞれ小印や印銘という問屋ごとの商標や値段が記され、これをもとに取引を行いました。出荷できる量が集まった七島蕨は、航路の場合は、八坂川から小船に積んで守江港に運び、そこから大阪や関東へと運ばれました。陸路の場合は杵築駅から貨物列車によって運ばれていきました。



製品となった七島表：「杵築古写真」（大分県公文書館）



吉見商店の小印版

印銘用の太筆

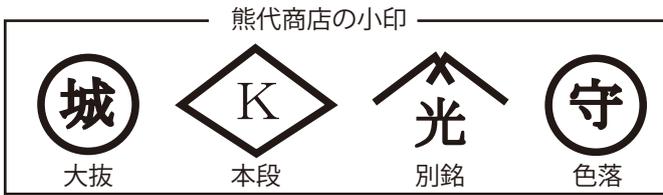
問屋の暗号①—ふちょう符牒—

符牒は、問屋や仲買人の中で使われる特別な記号です。生産者の前でも価格の数字を話すために作られました。1から10までを特殊な記号と呼び名で表現します。例えば、ダイマルの場合は、10、100、1000を表します。ヤマツジとした場合は、24、240、2400を表しています。また33のように数字が並ぶ場合は、ウロウロとは言わず、ウロナラビとしました。

数字	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
記号	大	へ	△	×	又	又	又	又	久	○
呼び名	ダイ	ヤマ	ウロ (サン)	ツヂ	カタリ (ハン)	リュウ	シャク (カタヌケ)	ヌケ	ク (キユウ)	マル

問屋の暗号②—小印—

小印は問屋の屋号や商号を表すものです。各問屋では品質ごとに、上質のものから「大抜」「本段」「別銘」「色落」など大まかに分類されます。この分類ごとに小印を打ち、一目でどの品質なのか解るようになっています。



各問屋で使われていた小印



問屋の暗号③—印銘—

印銘は、問屋と取引先の間のみで共通する蕨の価格を表すものです。取引をした当人同士しか解らないものなので、仕入値や売値などの商取引きの秘密を守るためや誤送を防ぐために作られました。

印銘は、小印に対し、十二段階ほどの階級が設定されています。同じものがあってはいけないため、問屋ごとに工夫を凝らした印銘を考えます。

元島商店では最高値のものには「天」、続いて「地球」「富士」という壮大な名称がつけられており、蛇の目商店では、「琵琶湖」「五十鈴川」「春日山」など名勝や自然にあるものが使用されました。このように、名勝、旧跡、地名、山、川、城、溪谷、謡曲の名前など問屋ごとにさまざまな印銘があります。

熊代商店商報

◆ 本表以外の印銘は御希望に應じ仕立申上げます

品		小印	品	小印	品	小印
大抜優良品		城	改良本段		目付品	
品	電路	品	品	電路	品	電路
金澤城	カチ	名馬	東大川	ヒヨ	美作川	ミサ
笠岡城	カサ	古戦場	高橋川	タハ	但馬川	タウ
淡路城	アサ	扇乃崎	吉井川	ヨシ	長門川	サヌ
岩田城	イシ	源平	四國川	シコ	讃岐川	サシ
明石城	アカ	青洞門	伊豫川	イヨ	出雲川	イモ
岡山城	オカ	松秀峰	石見川	イシ	備前川	ホネ
水戸城	ミト	峯乃崎	出雲川	イモ	長門川	サヌ
庭瀬城	ニハ	扇乃崎	備前川	ホネ	讃岐川	サシ
掛川城	ナツ	源平	出雲川	イモ	出雲川	イモ
千代田城	チヨ	扇乃崎	備前川	ホネ	備前川	ホネ
足守城	アモ	源平	出雲川	イモ	長門川	サヌ
高松城	タマ	古戦場	吉井川	ヨシ	讃岐川	サシ
江戸城	エド	名馬	四國川	シコ	出雲川	イモ

● 本表は発行當日相場に付成行に従い精々相働き申上げます

(『豊後の七島』より)

(3) 行事の中の七島い

七島いの利用方法は、畳表だけではありません。長さが足りない七島いは、「シットウクゼ」と呼ばれ、捨てることなく、円座、草履、七島縄などの日用品に加工されました。これらの日用品は、現在も杵築市内の中で行われている伝統行事の中で使用されています。

若宮八幡社御田植祭り

毎年4月6日に杵築市宮司の若宮八幡社で行われる稲作の予祝儀礼です。境内を田んぼに見立て、牛や馬による代掻きや早乙女による田植えなど、神様の前で稲作の作業を真似ることで豊作を願う行事です。この御田植祭りでは行事の最後には弁当を持ってきた妊婦が産気づき、その場で出産する演技があります。生まれた子供の性別によって、その年に氏子が出産する子どもの性別は男女どちらが多いかを占います。

以前は行事の中で早乙女が使う稲苗を一株ごとにまとめるためにシットウクゼを紐として使用していました。



若宮楽

毎年、9月中旬に杵築市宮司の若宮八幡社で行われる楽打行事です。中世の風流踊と念仏踊の系譜を引く芸能で、風災虫害防除や五穀豊穡を目的として奉納されます。以前は、大鴨川と中津屋の二地区の人々が担い手でしたが、後継者不足のため、現在では北杵築小学校の児童によって継承されています。

舞手の衣装である腰蓑の材料は、七島苧の縦糸に使うイチビという植物です。イチビは七島い以上に入手困難となりました。また、近年では丈夫で長持ちする七島い製のわらじを使用しています。



いでわら はしらまつ 出原の柱松

毎年、8月14日に杵築市大字中の出原地区いでわらで行われる盆行事です。長さ10mの杉丸太の先端に木の枝とカズラで籠かごを作り、麦わらを小縄で縛りつけ、籠の中にも麦わらを詰めたものが柱松です。機械を使わず、梯子はしごやサスマタを使って垂直に立て、三方に綱を張って安定させます。日没後には、火をつけた投げ松明を籠に投げ込み焼き落とす県内でも珍しい行事です。最後に綱を切って倒れた方向でその年の吉凶を占います。

耐火性と強度のある七島いで作った綱や縄は、投げ松明の持ち手や柱を支える綱として使用されていました。



い こぎょうじ 亥の子行事

毎年9月から11月に杵築市内の各地で、子孫繁栄、五穀豊穰、商売繁盛を祈願する亥の子行事が行われています。子供たちが家々を回り、歌にあわせて亥の子石をついてまわります。主に小学生から中学生の男子が参加し、年長者の子供を代表者として子供たちだけで行程を決める地域の通過儀礼のような要素もあります。

亥の子石には持ち手となる綱を幾本も付け、息を合わせて引き合い地面をたたきます。持ち手は石の重さや引く力に耐えることのできる丈夫なものが向いており、七島いを栽培していた農家では好んで七島縄が使用されました。

